

## 【秩父三十四観音霊場巡礼：歴史と概要】

秩父巡礼路は、秩父、坂東、西国の地域にある 100 の神社を結ぶ 3 つの繋がった巡礼路のうちの 1 つである。これらは合わせて、日本百観音霊場巡りとして知られている。長野の岩尾城の遺跡で見つかった石碑には、少なくとも 1525 年からこの巡礼路を旅する巡礼者たちがいたことを示す文が刻まれている。しかしこの巡礼路は、その何世紀も前から存在していた可能性がある。平安時代（794～1185 年）の説話集には、「毎月 18 日に、お清めを済ませたあと 100 の観音霊場を巡礼した男」についての記述がある。

百観音霊場巡りの巡礼路は、和歌山県の青岸渡寺から秩父の皆野町の水潜寺まで、約 1,200 キロメートルに及ぶ。巡礼路にあるすべての寺には、観音様の彫像が安置されている。仏教の多くの宗派における基本的な経典である「法華経」には、観音様が 33 の異なる姿で描写されている。百観音霊場巡りが確立される以前、秩父、坂東、西国の 3 つの巡礼路は、それぞれ 33 の観音像を参詣する巡礼路であった。しかし 16 世紀初頭頃に、34 番目の寺（第二番、真福寺）が秩父巡礼路に追加され、100 の寺からなる一続きの巡礼路ができた。これが百観音霊場巡りとなった。

坂東と西国の巡礼は全て回るのが数週間かかることがあるが、秩父の巡礼は秩父盆地の中でしっかりとグループ化されており、わずか数日で終わることができる。巡礼路の長さは合計で約 90km で、その一部は車で移動することもできる。これらの理由から、秩父三十四観音霊場巡りは、それほど大変な労力をかけることなく行うことができる観音巡礼として、長い間人気を博してきた。

特に日本の中世（12～16 世紀）の間、地域間の移動は厳しく管理されていた。しかし秩父の巡礼路は非常にコンパクトであるため、旅行者は関所を通過する必要がなく、巡礼者に非常に人気があった。

17 世紀後半から観音崇拜は非常に流行し、三十四観音巡礼路も人気を呼んだ。巡礼路の三十四観音像は、18 世紀の間に何度か江戸（現在の東京）に展示された。これらの展示は人々の関心を集め、秩父を訪れる巡礼者の数が爆発的に増加した。1804 年から 1830 年の間に秩父三十四観音霊場巡りに訪れた人の数は、毎日 2 万から 3 万人と記録された。さらにこの人気は、何世紀にもわたって衰えることがなかった。1996 年 4 月から 6 月にかけて催された、12 年に一度の観音像総開帳の折には、18 万人以上の人々が秩父巡礼路を訪れた。

何世紀にもわたって、衣服やその他の付属品を含め、巡礼の多くの文化的側面が慣例的に成文化されてきた。しかし、巡礼路自体を所定の順序で巡る必要があるわけではない。巡礼者は、寺の番号順に巡る（順打ち）こともできるし、最後の番号の寺から始めて、逆順に巡る（逆打ち）こともできる。あるいは、各自都合のよい順序で巡ってもよい。道すがら各寺への参拝の記録を収集するなわらしもあり、多くの場合、特別な冊子に印章（御朱印）を押してもらうという形式である。寺ではまた、さまざまな恩恵と御利益をもたらす小さな魔除け（お守り）が販売されていることが多い。